

book

最近、おもしろかった本

『やつらはどこから』

高木國雄 著 作品社 1680円(税込)

事件を通して描かれる現代人の心の闇

著者は当会会員の高木國雄氏である。本書はとにかく面白い。先ず現実臨場感がある。弁護士にとって日常身近に扱っている「事件」を素材にしているからであろうが、鋭くかつ巧みに描いているからでもあろうか。

本書の「あとがき」によれば、本書におさめた6編は、いずれも文芸同人誌「海」(1999年ないし2004年の60号から70号)へ発表した11編の内の6編とあって、著者の次の記述は印象的である。すなわち、「これらを書くに当たって、私の裡で、日々慌しく過ぎてきた時間のどこかで、はっと感動に突き動かされた物事の記憶へつながっていることがあった。慌しく動きまわることと、その目的を精一杯果したいという焦燥にかられる日常へ突然訪れたものであったからこそ、予期しない感動が鮮明だったのかもしれない。……書き進むという作業をくり返すなかでのほんのたまに、私の裡に感動の一部が甦ったと思える瞬間があった。このわずかな一時だけは、書くという手の作業が、感動を確かに言葉に結びつけている、といった思いになれた」と述べている。やはり、著者は、弁護士として、日常の慌しい事件処理をしながら、そこでの感動を言葉に残し、それを小説という形式で表現し終えているのである。

6編中、私が一番面白かったのは、本書のタイトルでもあ



る「やつらはどこから」である。これは中学校での「恐喝・いじめ」問題と、経済社会での「強請り・たかり」事件を、同時並行、かつ内的関連性の中で、ドラマ仕立てへと構成している作品である。本書の帯には、「現代日本に生起する荒唐の日常を活写する、現職弁護士による異色の小説集」ともある。適切なコメントで、この作品から読み始めることをお勧めしたい。

次に私が面白く、弁護士以外の一般読者にもお勧めしたいのは、「絆」である。この作品は、ひとつの「傷害事件」について、社会的経済的背景の描写から「人間とは何だ」という内省へと迫るものである。そして、夫婦・家族・兄弟関係・事業欲・人生観などについての在り様を格調高く活写したものである。

その他の作品群も力作で、さまざまな人間の煩惱や生き様を、文章の運び・構成も巧みに小説という形式で表現しきっている。まさに、事件を通して現代人の心の闇を描いているのである。どの作品も、最後にひとひねりすれば、別の立派なサスペンスドラマに変質すると思う。

いずれにせよとにかく面白い。一読を乞う次第である。

(会員 田塚 良三)

心に残る映画

『トリコロール／青の愛』

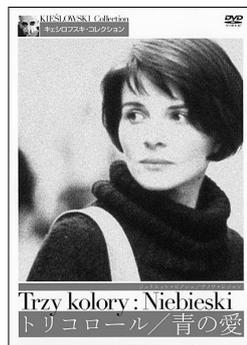
1993年／フランス／クシシュトフ・ケシロフスキ監督作品

青を基調にした美しい映像と主人公のアンビバレンスな心

「トリコロール／青の愛」は、巨匠クシシュトフ・ケシロフスキ監督がフランス国旗を構成する青・白・赤3色をモチーフとして、それぞれのテーマカラーを題材に愛の形を描いた3部作の第1弾である。青は、「自由」をテーマにしている。

主人公のジュリーが、突然の交通事故により作曲家の夫と愛娘に囲まれた幸せな家庭を一瞬にして失ってしまうところから物語は始まる。夫の死後、実は夫に愛人がいたことも分かり、その愛人は夫の子供を身籠もっていることも判明する。突然家族を失ってしまった衝撃に加え、愛人の存在や、自分は娘を失ったにもかかわらず愛人には夫の子供の命が宿っているのである。しかも、その愛人の存在を知らなかったのは、当のジュリーだけで、夫の周囲の人間には公知の事実であったというのだから、ジュリーの心の動揺は痛々しいことこの上ない。

今まで守ってきたもの、信じていたものを全て一瞬にして失ってしまった喪失感、やり場のない悲しみと衝撃から「自



『トリコロール／青の愛』
DVD
価格：3990円(税込)
発売元：アーティストフ
ィルム 発売元：東芝エ
ンタテインメント 販売
元：ジェネオン エンタ
テインメント

由」になろうと、ジュリーは今までの全ての関係を断ち切ろうとするのである。しかし、結局そうしたことで喪失感からも、慟哭からも解放されることはなかった。最後にジュリーを解放したのは、亡夫が残っていた未完成の協奏曲を、ジュリー自身が完成させることによってであった。

地味なストーリーであるが、テーマカラーの青を基調にした映像がとても美しい。青い映像と、淡々とした抑え気味の台詞とが相まって、逆に主人公の心の動きを際立たせているように思える。

登場人物の全員が互いに相手をいたわり合いながら、それぞれ何かの束縛から「自由」になりたいと日々もがきつつ暮らしている風景を描いたドラマであり、人の優しさ、強さがじわりと伝わってくる作品である。見終わると、言いようのない清清しさが広がっている。

(会員 鶴田 恵美)